



国際交流員の活動日誌

vol.80



とを夢見ています。心が癒されるので、みなさんもぜひ「霊山」の美しい景色を見に行ってください！（ララ）

「霊山、幻想的な秋」

The Magical Autumn of Ryozen

英訳版を見る▶



アメリカで伊達市を検索すると真っ先に出てくる「霊山」は、日本に来る前から知っていました。約2年の伊達市在住中、初めて霊山に登ったのは去年の11月のことです。霊山紅葉まつりの頃、霊山は紅葉の盛りで、登山口から少しも進んでいないのに、目の前に鮮やかで華麗な色彩が広がり、思わず立ち尽くしてしまいました。登山道をさらに進むと息をのむような光景が続きましたが、登山に慣れない私は、最初の急勾配を喘ぎながら登り、すれ違った人たちに気さくに挨拶を返すのが精いっぱいでした。少し慣れて余裕ができると、岩を

登ったり、ロープを使いながら厳しい所を登ったり、遺跡を見たりして色々な冒険を楽しむことができました。

しかし、登山道は所々危なそうな場所があり、ロープやガードレールなどがないことにビックリしました。特に一人ずつしか通れない崖の「蟻の戸渡り」には驚きました。素早く渡っていた年配の方を見て、憧れを感じずにはいられません。頂上から見えた景色は、言葉で言い表せない、一生忘れることができないものでした。もっと早く訪れたら良かったと思います！

当時は人が多かったため、動物の気配がありませんでしたが、またいつか霊山に登ったら、カモシカに出会えることを夢見ています。

地域の魅力 ふる里再発見

170 年前の地球儀

令和5年度第2回企画展
市柳熊坂家の至宝

12/25日まで
伊達市保原歴史文化資料館

伊達市保原歴史文化資料館で開催中の企画展では、江戸後期に活躍した保原出身の絵師・熊坂蘭齋と、蘭学者・医家の熊坂蘭齋の兄弟に関するさまざまな資料を展示しています。今回は蘭齋の足跡と珍しい地球儀を紹介します。

蘭齋は、寛政11（1799）年に伊達郡市柳村（現在の保原町）に生まれましました。実兄の適山は、絵師（南画）として著名です。父傳右衛門は、子供たちに対して大変教育熱心でした。

蘭齋は、はじめ江戸で漢方医学を学び、その後蘭学を学びました。オランダ語に造詣が深く、オランダ語の文法書を翻訳した『和蘭文典前編』を天保11（1840）年に出版しました。

江戸時代後期からペリー来航以降の幕末にかけて、日本は混沌とした社会を迎え、各藩では多くの蘭学者

を藩士として召し抱えましました。適山が絵師として松前藩に迎えられ、蘭齋は嘉永5（1852）年に松前藩の藩医となりました。これは蘭学を通して身に付けた外国情勢や知識を藩政に活かすためと考えられます。

展示中の地球儀は、1852年頃のイギリス製です。日本に現存する地球儀でも最古の部類に入ると考えられます。携帯用で、折りたたむことができます。中央に70cm余の鉄の軸があり、周囲の8本の金属の骨を開くと球形の地球儀になります。ちょうど雨傘の構造と似ています。この地球儀から、蘭齋は遠くイギリスの情報を得ていたことがわかります。



イギリス製携帯用地球儀

※10月号17～18行目に誤りがありました。天正30年と記載しましたが、

正しくは天正18年です。訂正してお詫び申し上げます。